

La Movado

Fondita en 1951 N-ro 799 septembro 2017

komuna organo de:

KANSAJA LIGO de ESPERANTO-GRUPOJ
Sone-higasi 1-11-46-204, Toyonaka-si, Ôsaka-hu, 561-0802

KJUŜUA ESPERANTO-LIGO
Tohurô minami 2-8-7, Dazaihu-si, Hukuoka-ken, 818-0105

ESPERANTO-LIGO de TYÛGOKU kaj SIKOKU
Kannonmen 14-1, Kusiki, Kitanada-tyô, Naruto-si, Toku-
sima-ken, 771-0371, KITANI Tomoko

ENHAVO

峰芳隆さんの足跡をたどって.....	1-2
初心者のための語尾なし単語の使い方(57) ... 相川節子	3
Kajero Libervola: Serĉi originalon.. HIROTAKA Masaaki	4
Tagoj en Kansajo..... KOTHA Naga Siva Kumar	5
対訳: 私はかうして死んだ!(終)	
..... 平林 初之輔 / belmonto	6-7
公開番組と桂福点さん.....	山野 敏夫 8
峰芳隆さん追悼.....	8-11
姫路E会創立から関西大会まで.....	稲田 正昭
峰芳隆さん ありがとうございます.....	村田 和代
エロシェンコでお世話になりました.....	引田 秋生
峰さんの業績は大きい.....	原田 作
Adiaŭo al s-ro MINE Yositaka.....	Vilmos BENCZIK
Rememoro pri kara amiko.....	Petro CHRDLÉ
Salono: 平和を願う CD.....	相川 節子 12
Kurantaj Vortoj.....	12
La Movado: 九州エスペラント大会ほか.....	12
Vortkruca enigmo / 料理のビデオ募集.....	14
Mikspoto / 作文教室課題 / KLEG 事務局だより.....	15
編集ノート.....	16

峰芳隆さんの足跡をたどって

編集部

峰芳隆さんが亡くなったのは6月5日。1941年9月生まれだから、75歳ということになる。病気と闘いながらエスペラント活動を続けてこられたが、2014年の第62回関西エスペラント大会への参加を最後に、活動の表舞台からは一応退かれた。しかしその後も『関西エスペラント連盟65年史』をまとめるなど、活動に向ける意欲は健在だった。

峰さんの功績は多方面にわたる。したがってその全部を知る人はほとんどいないだろう。山にたとえれば、富士山のように誰にでも全容がわかりやすい姿ではなく、山全体を一望するのが難しいチョモランマ、ということになるだろうか。見る人の位置によって、目に入る部分も印象も違う。ここに書く「峰さん像」も、実際の功績のごく一部かもしれない。

◆学生時代の活動

峰さんとエスペラント運動の接点は十代に始まっているが、本格的に学び始めたのは1963年、関西

エスペラント連盟の事務所を訪ねてからだという。

学生エスペラント運動が盛んだった時期で、京都大学・大阪大学・同志社大学など、各地の大学にエスペラントクラブがあり、1961年に関西学生エスペラント連盟(KLES)が誕生していた。田熊健二さん、中道民広さん、北川昭二さん、土居敬和(ひろかず)さん・塩田(現・土居)智江子さんなどの親交は、KLESや関西エスペラント連盟(KLEG)の活動を通じて1963年に始まっていたと思われ、晩年まで続いた。峰さんは、当時国内留学していた鉄鋼短期大学(現在は産業技術短期大学)でエスペラント研究会をつくり、学園祭の展示に参加した。



峰芳隆さんをしのぶ会

日時 : 10月1日(日)午後2時より4時まで

会場 : 神戸市青少年会館5階 研修室(JR三ノ宮駅東出口下車で徒歩3分、神戸市中央区役所の隣)

連絡先: 関西エスペラント連盟

※平服でおいでください

国内留学を終え、職場復帰してからは、全国合宿に参加したり、出張で東京へ行く機会を利用したりして、関東その他のエスペランチストとも親しくなった。後述する出版活動では、峰さんの豊かな人脈が活かされた。

◆地方ロンドの創立・活性化の活動

地元のエスペラント会をつくるため、峰さんは日本エスペラント学会(現在は日本エスペラント協会)の名簿などで、姫路とその近辺のエスペランチストひとりひとりを訪問、1965年に姫路エスペラント会が誕生した。

会員の転居や職場の条件で実質的に会の活動ができなくなった時期もあったが、会員との連絡は保ち、対外的にも看板はおろさなかった。

その後、再び活気を取り戻した姫路エスペラント会は、2003年にははりまエスペラント会と改称し、会員も増えた。姫路・はりまの両時代を通じて、峰さんはずっとロンドの活動の中心にいた。

◆関西エスペラント連盟での活動

峰さんはKLEGの理事として、また2003年からは事務局長として、長年KLEGを支えてきた。

サカモト・ジョージさんが亡くなったあと、KLEG事務所の当直は事務局のメンバーが曜日ごとに交代で勤めていたが、峰さんは退職を機に週2日事務所に詰めた。外部からの問合せの対応、書籍の在庫管理や注文された本の発送、会計処理など、こまごまとした事務をこなした。

KLEG図書部長の任にあたったのは1996年から。KLEGが発行する本の企画とその実務、国内外から仕入れる本の選択、国外から輸入する本の価格決定なども峰さんの仕事だった。関西大会の会場で、大会中ずっとlibroservoに詰めていた峰さんを記憶しておられる方も多だろう。

“La Movado”の編集にたずさわったのは1998年から。のちに編集長の小西岳さんが体調をくずされ実務にかかわれなくなってからは、実質的な編集長だった。記事の企画、執筆の依頼、割り付け、印刷所とのやりとり、校正など、発行にいたるまでの段階のすべてが峰さんを中心に動いていた。

◆執筆・出版活動

さまざまな活動をしてきた峰さんだが、いちばん力を注いだのは、出版活動だったのではないか。

ウクライナ人エスペランチスト、ワシリー・エロ

シェンコの著作集は6冊、KLEGの図書刊行部門であるJapana Esperanta Librokooperativoから出ているが、すべてを峰さんが編集している。エスペラントで書かれた作品をそれぞれ見つけ、原文が日本語で書かれた作品も含め、当時手に入る材料は全部集めた、息の長いとりくみだった。

『日本エスペラント運動人名事典』への貢献も大きい。1981年から84年にかけてLa Movadoに「日本エスペラント運動人名小事典」が連載され、後に出版されたが、執筆者のひとりには峰さんだった。これを元に、峰さんはより充実した事典を作ろうと資料を集めていたが、柴田巖さんがこの企画を引き継いだ。柴田さんは執筆のためさまざまな資料をあたったり、各地のエスペランチストにインタビューして材料を集め、峰さんは全面的に柴田さんを支えた。柴田さんが病気で亡くなったあと、後藤齊さんが引き受け、2013年に『日本エスペラント運動人名事典』がひつじ書房から出版された。

人名事典のために集めた情報は、三宅栄治著『闘うエスペランチストたちの軌跡』片岡忠著『闇を照らすもうひとつの光』高杉一郎著『ひとすじのみどりの小径(こみち)』の資料としても役立った。

文芸雑誌Interkultura Revuo “Riveroj”は、峰さんと吉川獎一さんが発行した文芸雑誌で、季刊誌として26号まで続いた。国内だけでなく、中国などからも原稿が寄せられた。また、文芸評論の出版を目的とするLa Kritikantoも峰さんが立ち上げた。

関西エスペラント大会では、新しく出版された本を記念品にすることが多かったが、その大部分は前述のJapana Esperanta Librokooperativoから発行された。そして、そのほとんどに峰さんがかかわった。

2008年の小坂賞は峰さんと藤本達生さんが受賞したが、峰さんの受賞は「宮沢賢治とエロシェンコの研究およびエスペラント図書と雑誌の編集」が評価されたもの。また、世界エスペラント協会のGrabowski賞では選考委員をつとめた。

◆国内外に友人

エスペランチストであれば、国外にも友人を持つのは自然なことだが、峰さんの場合は、運動論やエスペラント文学に関する意見を闘わせ、共感しあえる相手、本当の意味の「同志」を国内外に得ていた。

その誰にとっても、早すぎるお別れだったに違いない。

初心者のための

語尾なし単語の使い方 (57)

相川 節子

接続詞 (9) ke (つづき)

①、②のどちらの場合も、初心者が気をつけなければならないことがふたつあります。ke 以下の文に使われる人称と、動詞の時制です。

Masao diris, "Mi estas studento."

Masao diris, ke li estas studento.

(マサオは「ぼくは学生です」と言った)

上が直接話法で、マサオが言ったせりふそのままです。しかし下の間接話法になると、ke 以下の文の中では、マサオが mi と行った部分が li になります。つまり、文全体の話者の立場で見る人称になるのです。もし ...ke mi estas studento とすると、マサオが自分のことではなく、この文の話し手が学生だと言っていることになってしまいます。

もう少し複雑な文の例になっても同じです。

Masao diris, "Mia patro vizitis min kun mia plijuna frato."

Masao diris, ke lia patro vizitis lin kun lia plijuna frato.

(マサオは「ぼくの父と弟が訪ねてきました」と言った)

ついでですが、一語加えた次の文を、間接話法にしてみてください。

Masao diris, "Mia patro vizitis min kun mia plijuna frato hieraŭ."

(マサオは「ぼくの父と弟が昨日訪ねて来ました」と言った)

hieraŭ をそのまま使えるでしょうか？

間接話法は、文全体の話者の立場で表現します。ですから、Masao diris... と話している人にとって、その時点で hieraŭ なのかがどうかが問題です。間接話法への一般的な言い換えとしては、

Masao diris, ke lia patro vizitis lin kun lia plijuna frato en la antaŭa tago.

とするのが無難でしょう。状況によっては、つまりマサオから聞いたことをその日のうちに話しているなら、hieraŭ をそのまま使って差し支えありません。

時制ですが、過去・未来・現在の使い分けについては、日本語の感覚とほとんど変わりませので、

La Movado 799

ke を使う構文に関しては、英語のような「時制の一致」を気にする必要はありません。例えば：

Kolombo kredis, ke la atingita kontinento estas Hindio.

(コロンブスは、到達した大陸がインドであると信じていた)

時制で要注意なのは、ke 以下の文が話者の願望や要求、あるいは目的を表している場合です。これも実例をお見せする方がわかりやすいでしょう。

La ŝoguno ordonis, ke oni ne mortigu hundojn.

(将軍は、犬を殺すなど命令した)

Mi deziras, ke vi sukcesu en la ekzameno.

(試験に合格なさるよう願っています)

Li viŝis la tablon, por ke ĝi estu pura.

(彼はきれいにするためテーブルを拭いた)

動詞の -u の形は、普通「意志法」と呼ばれています。話し手の意志を表すからです。入門講座では、受講生にわかりやすいよう、英文法でおなじみの「命令形」と名称をわざと使うこともありますが、「命令」は -u 形の機能の一部にすぎません。

ところで、話し手の願望や意志を表しているように思えるのに、-u 形を使わない例があります。esperi, ke... と promesi, ke... です。

Mi esperas, ke la kongreso sukcesos.

(大会が成功することを期待しています)

Ludoviko devis promesi, ke li forlasos la aferon pri mondlingvo, almenaŭ provizore.

(ルドビコは、少なくとも当分の間、世界語に関することから離れると約束しなければならなかった)

esperi は「希望する」と訳されていますが、わたしは「期待する」の方が近いと思っています。実現に確信を持っているのが esperi で、実現可能性のあるなしに関係なく願っているのが deziri です。esperi, ke... に、意志法ではなく直説法の現在形や未来形が使われるのは、そのためではないでしょうか。

promesi も、「約束する」と翻訳して間違いではありませんが、この動詞には「約束された未来」「約束の土地」というような、「必然」のニュアンスがある。「約束する」より、「請け合う」が近いかもしれません。

「楽しい作文教室」は、担当者が世界大会参加のためお休みです。新しい課題文は p.15

カロチャイが 1931 年に "Eterna Bukedo" で発表したエスペラント訳俳句 9 句の種本は何か。いろいろ調べた結果、ほぼ確かな結論を得ました。

Trovi originalan tekston de tradukita hajko, se la tradukinto ne indikis la fonton, estas tre malfacila tasko por legantoj. Ofte okazas, ke iu hajkisto verkis plurajn similtajn hajkojn. Estas malofte, ke ĉiuj hajkoj de iu hajkisto estis registritaj en unu referenclibro.

En 1931 Kaloĉajo (*Kalocsay*) publikigis la libron "Eterna Bukedo", en kiu aperis esperantigitaj poemoj el 22 lingvoj, 115 aŭtoroj. Inter ili troviĝis ankaŭ naŭ japanaj hajkoj de ses aŭtoroj. Kvar pecoj de Baŝoo (*Basho*) kaj po unu de Kjorai (*Kyorai*), Moritake, Kakei, Ĵoosoo (*Joso*) kaj Kikaku. Tio estis la monumenta traduko, kiu difinis la postan evoluon de la hajko en Esperanto. En la libro Kaloĉajo prezentis nur esperantan tradukon, sed ne originalan tekston.

Kiam unuafoje mi legis la esperantigitajn hajkojn, mi povis tuj diveni kelkajn originalajn tekstojn. Sed pri la aliaj mi devis serĉi per diversaj rimedoj: libroj pri la hajka historio, hajkaroj de Baŝoo kaj serĉado en la interreto. Kaj fine mi sukcesis identigi la originalajn tekstojn krom unu peco.

Komence de la kuranta jaro do restis unu hajko, kies originalo ne estis identigita. Ĝi estas jena hajko de Baŝoo:

Jen, — krio mola!

Ĉu estis voĉ' de l' Luno?

Ne! Voĉ' kukola.

En ĝi aperas luno (*tuki*) kaj kukolo (*hototogisu*). Mi tuj rememoris faman pecon de Baŝoo, en kiu aperis la du elementoj:

Hototogisu

oo-take-yabu wo

moru tuki-yo

ITOO Saburoo esperantigis ĉi tiun pecon jam en 1930.

Kriis ja kukol',

Tra granda bambuar';

Ho, luna la klar'.

Bedaŭrinde ĉi tiu peco ne estas la serĉata hajko, ĉar en la pridiskutata peco ne aperas eĉ fragmento de bambuo (*take*).

Mi hipotezis, ke Kaloĉajo prenis siajn tradukitajn hajkojn el iu(j) fontolibro(j) eldonita(j) en tiutempa Eŭropo. Laŭ historiistoj pri literaturo, en la dua duono de la 19a jarcento komenciĝis prezentado de japanaj hajkoj en Eŭropo. Kaj en la unuaj jardekoj de la 20a jarcento ekfloris hajkoverkado inter eŭropaj (precipe francaj) poeziamantoj.

Konataj estas tri verkoj, kiuj prezentis la japanan hajkon sisteme kaj amplekse al tiamaj eŭropaj legantoj: *B. H. Chamberlain "Basho and the Japanese Poetical Epigram"* (1902) en la angla, *K. Florenz "Geschichte der japanischen Litteratur"* (1906) en la germana, *P. L. Couchoud "Le haïkai: les épigrammes lyriques du Japon"* (1906-1916) en la franca.

Mi trafolumis tiujn verkojn, komparis la cititajn hajkojn kaj fine konstatis, ke la verko de Florenz, en ĝia ĉapitro "*Das japanische Epigramm*", entenas ĉiujn naŭ hajkojn esperantigitajn de Kaloĉajo.

Se ne aperos aliaj atestaĵoj, mi povas provizore konkludi, ke Kaloĉajo apogis sin sur ĉi tiu verko de Florenz, ĉar li erare skribis en "Eterna bukedo", ke Baŝoo (1644-1694) naskiĝis en 1643, kiu sama jarindiko troviĝis ankaŭ ĉe Florenz.

La originala japana teksto de la pridiskutata hajko estas jena:

Hito-koe wa

tuki ga naita ka

hototogisu

Florenz, kaj ankaŭ Chamberlain, prezentis ĉi tiun hajkon kiel verkon de Baŝoo. Sed fakte ĝi ne estas tia. Neniu hajkaroj de Baŝoo enhavas la pecon.

Laŭ mia esploro ĝi estas komencaj versoj de iu Edo-kanteto, kiu estis prezentita unue en teatraĵo en 1857 kaj poste furoris inter kantetamantoj. Kvankam mi ne povas diri, kial ĝi estis erare atribuita al Baŝoo, ne malofte okazis tiaj miscitoj rilate al hajkoj de Baŝoo.

Tagoj en Kansajo

KOTHA Naga Siva Kumar (Barato)

Post tre bela vojaĝo en Kobe kun s-ro *Isogai Naotake* je 30a de Majo, 2017. Je merkredo 31a de Majo, 2017 mi komencis al Kioto la urbo kun granda historio en Japanio de *Kobe*. Irante per trajno de *Kobe*, sola mi estis en la trajno kiu rekte iras al la urbo Kioto. Kial mi diras “sola”, ĉar en trajno kaj plej multaj lokoj en Japanio la anoncoj kaj skriboj estas nur en japana lingvo kaj mi ne konas japanan lingvon. Nur por ke Esperanto estas pontlingvo mi tre facile povis trovi multajn lokojn senprobleme.

Je 30a de Majo, s-ro *Yamamoto Nihoe* jam mesaĝis al mi dirante ke li trovos min en la stacidomo *Osaka* en la trajno kaj helpos min trovi lokon en Kioto kie mi loĝos por 2 tagoj. Li senforgese venis al la stacidomo de *Osaka* kaj s-ro *Isogai* kaj s-ro *Yamamoto* estis en kontakto por ke s-ro *Yamamoto* povos trovi min facile. Mi kaptis nian verdan flagon por ke s-ro *Yamamoto* ne maltrafu min. Sed, tuje kiam la trajno venis al stacidomo *Osaka*, li venis kun sia verda Esperanta flago kaj trovis min.

Ni babiladis kaj venis al la urbo Kioto. Ĝi havas tre grandan stacidomon. Mi diros pri tio poste. Ni kune iris al la Esperanta domo de Kioto kie s-ino *Aikawa Setuko* jam planis por mia loĝado por 2 tagoj en Kioto en la Esperanta domo.

Esperanta domo estas 3-etaĝa konstruaĵo kaj verda kiel la Esperanta Movado en Japanio, tre forta. Je 1a tagmezo mi atingis la Esperantan domon kaj mi estis akceptita de kaj ankaŭ ŝia filino. Mi mirante vidis la 3-etaĝa konstruaĵo, mi unue vidis multajn librojn, grandan lokon kie oni povas meti iliajn invitilojn kaj programoj. Je la 2a etaĝo estas la ĉambro kie mi loĝos por 2 tagoj, kiu ankaŭ funkcias kiel kunsida ĉambro por multaj kunsidoj. Mi, s-ro *Yamamoto* kaj s-ino *Aikawa* kune manĝis kaj tiam mi ekkonis ke en ĉiu merkredo Kiota

Esperanta ina kunsido okazas. Do mi estas tre feliĉa ke mi povos renkonti esperantistinojn de Kioto, kaj ankaŭ mi konis ke multaj eble venos ĉar ili jam planis renkonti min. Mi feliĉis aŭdi tion.

Post iom da tempo venis multaj virinoj de Kioto, kiuj ankaŭ estas Esperantistoj. Ili havas klasojn en ĉiu merkredo, s-ino *Aikawa* gvidas tiujn klasojn. Mi paroladis iom pri Barato, mia gepatra lingvo (kiel oni skribas kaj kiel oni parolas, ktp.) kaj kiom da lingvoj mi konas.

Ili estas tre aranĝitaj ĉar ili portis multajn kuirajojn por manĝi kaj dolĉaĵoj estas vere tre interesaj. Ni ĉiuj multe babiladis dum 2 horoj plenplene kaj nur en Esperanto.

Poste, mi ekkonis ke ankaŭ en vespero junaj esperantistoj en la Universitato Kioto renkontiĝas kaj mi petis, ĉu mi rajtas viziti kaj saluti ilin. Ili tuje kontaktis kaj sciigis al mi ke mi povas iri tien kaj ili multe ĝojos. Mi kun s-ro *Yamamoto* iris al la universitato de Kioto kaj renkontis junajn esperantistojn. Ili vere havas tre belan bibliotekon kaj ankaŭ ili havas ĉambron por la Esperanta klubo. Mi multe miris, kiel Baratano kiu neniam vidis multajn librojn de Esperanto en unu loko, mi vidis multajn librojn kaj ankaŭ ĉambro por Esperanto klubo en Universitato estas tre mirigema afero. Mi kaj s-ro *Yamamoto* kaj niaj 4 junaj esperantistoj babiladis dum 2 horoj kaj ili havas tre interesajn renkontiĝojn en ĉiu merkredo. Ili ĉiuj legas libron kaj diskutas pri tiu libro.

La kvar junaj esperantistoj estas: *Nakatsu Haruna*, *Huĵita Joiĉiro*, *Minami Yoshiaki*, *Sugashima Bungo*.

Mi vespermanĝis en la universitato Kioto kaj revenis al la Esperanta domo por dormi nokte. La mateno de 1a de Junio 2017 estas turisma tago en Kioto. Mi turismis kun s-ino *Aikawa* kaj kun s-ino *Sano Maki*.

Ni kune iris al multaj lokoj en Kioto je tiu tago, jen estas la listo:

[al p.13]

Mi mortis tiamaniere! (8)

HIRABAJAŜI Hacunosuke
tradukis belmonto (yamasita toshihiro)

“Kaj, ĉu vi lasis la gravan malsanulon sola en tiu ludomo?”

“Ne eble estis dormi en la sama ĉambro kun tiu pulmo-malsanulo. Tamen en la kazo senhoma dum nokto en la ĉambro, la najbaroj suspektos ĝin. Tial mi luis la domon en la pseŭdonimo TAMAMURA, kaj lasis lin sola sur la lito.”

“Kaj post kiam li estis preskaŭ morta kaj ne parolebla, vi petis la ekzamenon de la kuracisto?”

“Jes. Sed mi ne estis kulpa je malboniĝo de lia malsano.”

“Tamen, ĉu vi ne drinkigis al li viskion, aŭ alian?”

“Ho, vi analizis ĝis tio!”

Li diris, kun grasaj ŝvitaj sur sia frunto.

“Verdire, la malsanulo petis al mi, ke li neniel resaniĝos, tial drinkigu taseton da ŝatata sakeo por memoro de la vivo. Do, mi donis al li glason da brando. Li tre ĝojis kaj dankis, tamen, subite li falis en komaton.”

“Do, la mortinto estas ankoraŭ viva laŭ leĝo?”

“Jes, mi planis anonci la eraron kaj korekti la registron post la ĝenerala elekto.”

“Nu, vi bone scias pri la civitaneco de la viro?”

“Kiam mi portis lin en la domon, li estis tre ĝoja, kaj petis al mi la lastan procezon de sia kadavro, kaj parolis ĉion pri si.”

“Se vi deklaras tion, vi estos punita severe.”

Mi minacis lin kun ia intenco en mi.

Li paliĝis ankaŭ ĉi-foje kiel legomfolioj. Estis tute agrable rigardi ĉi tian sovaĝulon fariĝi pala.

2017.9

私はかうして死んだ！(8)

平林 初之輔 (1892 - 1931)

「で君はあの貸家にそんな大病人をひとりでおいといたのだね？」

「どうもあのひどい肺病やみと一つ部屋の中に寝ることもできませんし、それに夜、家を空けちゃこちらで、あやしまれますからね。玉村という偽名であの家を借りて、あの病人をひとりで寝かしといたんだす」

「そして病人がいよいよ駄目で口もきけないということがわかってから医者をおよびに行ったのかな？」

「そうです。でも僕が病気を悪くさせたのではないのですよ」

「だが、君は病人にウィスキーか何かのませやしなかったか？」

「そんなことまでわかりましたか」と彼は額に脂汗をにじませながら言った。

「実は、あの病人が、とても回復の見込みはないから、この世の思い出に好きな酒を一杯だけ飲ましてくれとせがむもんですから、ブランデーを一杯のましてやったのです。ところが彼奴(やつ)はひどく喜んでお礼を言っていたかと思うと、急に昏睡状態に陥ってしまったのです」

「では、その死んだ男は、まだ生きていることになっているんだな？」

「そうです、選挙がすんだら、間違いを届け出て訂正して貰おうと思っていたのです」

「では、その男の戸籍はわかっているのか？」

「僕がその男を家へつれてきたとき、大変よろこんで、死骸の始末だけしてくれと言って、僕に身元をすっかり話してくれました」

「そんなことを届け出たら君は大変な罪になるぞ」と私は、少し考えるところがあつたのでおどしてやった。

彼はまた菜っ葉のように蒼くなった。こういう荒くれ男が青くなるのは、見ている者には実に愉快なものだ。

“Sed,”

Mi daŭrigis vortojn kun supereco de venkinto.

“vi konfesis al mi honeste ĉion, tial mi ne akuzos vin al la polico. Sed ne longe forlaseble meti la montinton viva, kaj min vivantan morta. Mi mem anoncos kaj korektos la eraron.

“Vi estas la promesplena junulo. Ne faru ĉi tian malbonon la duan fojon. Kompatinde estas forfuŝi vian tutan vivon, do transdonu lian paperon de civitaneco al mi. Mi faros la formalajon kaŝe, kaj ne mencios vian nomon.”

Li tre dankis pro mia indulga traktado. Li prenis la paperon el la tirkesto de la libroŝranko, kaj portis ĝin al mi.

Jam pasis unu jaro de la okazaĵo. Kiel vi vidas, mi ne deklaris la aferon al la oficejo ĝis nun. TAMAMURA tute kredis, ke la procezo estis jam finita de mi. Tial, estas nenia zorgo deklari de lia flanko.

Mi mortis tiamaniere! Kaj ankoraŭ nun mi restas morta. Mi havas mian tombon, mia papero de morto estis akceptita, mia kadavro estis bruligita en la kremaciejo de *Oĉiai* post ekzameno de la kuracisto, kaj miaj ostoj estis enterigitaj en la tombon de miaj prapatroj. Neniu kontraŭleĝa difekto, neniu eraro - ĉio pruvas mian morton.

Nun mi jam kutimiĝis al mia sarkasma situacio, kaj neniam sentas naŭza. Sed se mi estus juĝita al ekzekuto post mia granda krimo, al kiu mortopunon deklaras la tribunaljuĝistoj? Ĉu ili deklarus morton al mi jam mortintan, denove? Se mi estus arestota sub iu krimo, kiun akuzos la juĝisto per papero de arestordono? Kion ili povus fari kontraŭ mi, jam enterigita kiel ostoj? Se mi havus amatinon kaj edziĝus, ĉu ŝi povus brakumi min kiel novedzo, kiu jam fariĝis cindro de la kremaciejo? **(fino)**

「だが」

と私はすっかり勝利者の優越感を味わいながら言った。

「君がすなおに白状したから、僕はこんな問題を警察沙汰にしようとは思わん。と言って死んだ男を生きたことにして、生きている僕を死んでしまったことにしておくわけにもゆかんから、これは僕から届けて訂正してやる。

君は、前途有為の青年だ、もう二度とこんな悪いことをしちやいかんぞ。君の一生を今棒に振らせては気の毒だから、その死んだ男の戸籍を僕に渡したまえ、僕の方からそっと手続きをすまして、君の名は出さずにおいてやる」

彼は、私の寛大な処置に非常に感謝して、本箱の抽斗（ひきだし）から紙片をとり出して私の方へもってきた。

このことがあってからもう一年になる。むろん私はいまだに、そのことは届けていないのだ。玉村は、私の方ですっかり手続きをすましたものと思いこんでいるから、彼の方で届け出る気遣いはない。

こうして私は死んでしまったのだ。そして今でも死んだことになっているのだ。私には墓場もあれば、死亡届も出ており、医師の診断を経て死体は落合の火葬場で焼かれて、遺骨は先祖の墓にうめられているのだ。すべてが少しも手続き上の違反もなく、手落ちもなく、私の死を証明しているのだ。

私は今では私自身の皮肉な位置になれてしまって、気味わるくも何とも思っていない。だがもし私が、大罪をおかして死刑にでもなるとしたら、裁判官はいったい誰に死刑の宣告を下すだろう。死んでしまった私にもう一度死刑を宣告するだろうか？ もし私が何かの罪で逮捕されるとしたら判事は誰に向かって令状を発するだろうか？ 骨になって埋められている私をどうすることができるだろう？ 私に恋人ができて結婚するとしたら、彼女は、火葬場の灰になった私を花婿として抱擁するだろうか？

(おわり)

関西大会 2017 奮戦記

公開番組と桂福点さん

山野 敏夫(豊中エスペラント会)

吹田市民文化祭の「エスペラントふれあい講演会」で聞いたことのある桂福点さんに関西大会で出演してもらえないかと思い「桂福点うえぶさいと」の問い合わせ画面から予算額を記載して約1時間出演してもらえないか相談したところ、了承が得られた。

内容に関してはお任せすることにしていたが、毎日新聞やNHKのラジオ深夜便で盲人の駅での転落防止のための創作落語を作られたことが紹介されたり、毎日放送テレビのVOICEという番組でも取り上げられ5月31日に東京の毎日ホールで公演されるとのことであった。これを知り関西大会でもこの落語をしてもらえればと思い相談したところ、落語の演目を「駅で落ちない話」にすると返信があった。

その後、毎日放送テレビの「ちちんぷいぷい」という番組でも福点さんが登場しこの落語についての説明があって、最後に6月3日の午後2時から大阪大学会館で開催される関西エスペラント大会で聞くことができるとのお知らせが放送された。当初はネットの「こくちーず」の利用も考えていたが取りやめた。

プロジェクトや効果音のための機材のテストの時間が必要とのことで公開番組の開場は15分前にした。会場入り口は一般市民を別にして公開番組チラシ、「盲人/視覚障害者と接するには」、JEIの三つ折チラシ、アンケート用紙、クリップ付きペンシルなどを同封した袋をアルバイトの女子学生が手渡した。

出口近くの机の上にアンケート回収箱を置いていたが、回収できたのは参加者40人に対し7枚だけだった。来場お礼と回収のための人員を配置しなかったのが悔やまれる。アンケートは無記名であるが公開番組を知ったのが知人からが6人、毎日放送テレビが1人、年齢は40歳代が2人、70歳代が5人だった。

第18回中国・四国エスペラント大会 Kongreso de Tyûgoku kaj Sikoku

日程：2017年9月30日(土)、10月1日(日)
場所：国民宿舎「良寛荘」(岡山県倉敷市)

峰芳隆さん追悼

姫路エスペラント会創立から関西大会まで

稲田 正昭(はりまエスペラント会)

峰芳隆君さようなら、心よりお悔やみいたします。10年近くにもおよぶ闘病生活、本当にご苦労さまでした。静かにお休み下さい。

私が社会人となり数年後、姫路にロンドを創るのに参加しないかとの誘いを受けた時は、とても嬉しかった。会創立後、週一回の例会を、青年の家や大本はりま分苑や喫茶店の一室を借り、君がリーダーとなり例会を持ちましたね。その後もっとエスペラントを学ぶ人を増やすため講習会を開こうとの君の提案で、広報板にポスターを貼ったり、ビラを配ったり、折り込み広告を入れたりしましたね。毎年、金木犀の花の香りが漂ってくる季節になれば、数人でポスターを貼り歩いた時を思い出します。講習会の時の、君の熱意ある教えは今も忘れられません。そのようなことが数年続いた後、私は仕事に関心が移りエスペラント活動から遠のきました。しかし君はエスペラント活動を継続し、多くの実績を残し、関西だけでなく全国に知られる人となりましたね。

私が62歳となり、会社生活とサヨナラしてからは、ときどき会うようになりましたが、その数年後に君から前立腺がんを患っていると知らされました。PSAの値がかなり高いと聞き、会社の同期の者がスプリング8の粒子線治療で完治した話をして、その治療を勧めました。その年の秋、一ヶ月間の治療の結果、PSA(前立腺特異抗原)の値は0近くになりました。でも残念ながら0にはなりませんでした。もう少し早く検査を受けていればと悔やまれます。その後ホルモン治療、抗がん剤等で頑張っただけでしたね。時々治療状況を聞く機会があり、その時、最近の出来事や宗教について、人生について等々、時の過ぎるのを忘れ語り合いましたね。多くの場合、君と余り考えは違わなかったですが、死刑制度だけは真反対でしたね、君の優しさに感心しました。

そして何よりも忘れられないのは、関西エスペラント大会が姫路で開催されると決まってからです。

君は多くの知識と経験・幅広い人脈・妥協しない指導力・緻密な計画で、大会を成功裏に導き、はりまエスペラント会員に自信と貴重な経験を与えてくれました、ありがとうございます。君がこの播磨の地に種を播

き育ててくれたエスペラント活動を枯らさぬよう
我々は努めていきます。

最後に君のご冥福をお祈りいたします。 合掌

峰芳隆さん ありがとうございます

エロシェンコ生誕 125 周年記念事業実行委員会
村田 和代 (神奈川県)

エロシェンコ (Eroŝenko) に関しての豊富な情報や経験をお持ちの峰さんが、とうとうあちらの世界へ旅立ってしまわれて本当に残念です。

峰さんが KLEG 図書部を担当されていた頃、随分お世話になりました。2001 年には私の所属していた小さなグループが販売した『ミラクル・バナナ』という絵本がありました。それは言葉の部分にエスペラント訳を貼り付けただけの粗末なものでしたが何と 20 冊も購入して頂いていた事が、今回メールの履歴を検索したところ判りまして改めて感謝の気持ちでいっぱいです。

Eroŝenko に関しては峰さんが出版された 6 巻の童話集が大変ユニークで惹かれるものがありましたので、個人的な興味から 2003 年には「バイタル物語」のエスペラント訳が存在するかどうかを問い合わせしていました。

その頃 Eroŝenko が日本語で書いた童話の中に 16 以上の未翻訳作品があることを知りました。

2011 年の東北大地震のショックで「今呼びかけないと誰からも忘れ去られてしまうのではないかとおそれて、日本中のベテランの Esperantisto にエスペラント訳のお願いをしました。

ですがその時はどなたからも積極的なお返事を頂けませんでした。2013 年に引田秋生さんという強い味方が現れてやっと作業が動き始めました。

2014 年になって何とか共同翻訳という形で取り組みないかとプロジェクトチームの立ち上げに着手し協力会員も 50 名を超えました。

その時峰さんは既に重い病を抱えておられたのですが、顧問になって頂き、いろいろ教えて頂きました。峰さんが折角示唆して下さい、エロシェンコ作品への様々なアプローチも私たちの力不足で結局果たせていません。どんなにか歯痒く感じておられた事でしょう。申し訳なく思っています。

2015 年には Eroŝenko 生誕 125 周年を記念する冊子を出版し、海外の Esperantisto にも送付することが

出来て、協力して下さいの方々へは感謝しております。

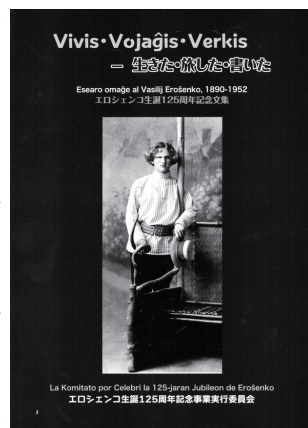
ですがもう一つの大きな課題である「日本語で書かれて未だにエスペラント訳がされていなかった Eroŝenko の著作をエスペラント訳して、発表する」という大きなプロジェクトが残っております。18 人の翻訳は既に九分通り進捗しているものの、担当者の多忙が原因で最後の校訂がまだされておりません。来年の日本大会までには何とかお約束を果たしたいと願っております。

エロシェンコでお世話になりました

エロシェンコ生誕 125 周年記念事業実行委員会
事務局長 引田 秋生 (山梨県)

峰さんには一度もお会いしたことはないし電話でお話したこともない。しかし、エロシェンコのことをきっかけに 2012 年 10 月からかなりの回数のメールのやりとりをさせていただいた。私は、ちょうど、フランスのグレジオンの研修会に出かける直前であり、エスペラントを集中的に貪欲に学び始めた時期であった。この時期に峰さんとメールで出会えたことは幸運でもあり、ある意味で運命的であったかもしれない。多くのことを教えていただき、更に、障害者の機器展示会であるサイトワールドの展示・講演会では、エロシェンコに関する沢山の資料を展示用にお借りした。まずもってこれらのことにお礼を申し上げたい。何度か宅急便で資料を送っていただいたが、丁寧にきれいに梱包されており峰さんの資料を大切にしてお人柄や研究姿勢を垣間見る思いがした。

2015 年の日本大会 (仙台) では、東大の藤井省三教授の「エロシェンコと鲁迅」と題した記念講演が行われたが、峰さんは仙台に行けないことを非常に残念がっていた。藤井教授の著書『エロシェンコの都市物語』には峰さんの協力が大であったと藤井教授自身が語っている。そして、当時「みすず」誌上で行われた藤井教授と作家の高杉一郎氏との論争では、二人ともよくご存じの峰さんは、間に立って



かなり忸怩たる思いをされたとのことである。

また、エロシェンコ選集で世界的に有名な峰さんであるが、宮澤賢治とエスペラントとの関係についてもいくつかの論考を發表しており、この分野でも造詣が深い。賢治の「雨ニモマケズ」のエスペラント訳の全リストについても紹介いただいた。一方で賢治とエスペラントについてはこの20年間、エスペラントサイドからの研究が進んでいないと嘆いていた。お元気なら峰さん自身が続けたかっただろうと思うと誠に残念である。

運動面でも KLEG の事務局長や La Movado の編集長などその先頭に立っていたと聞く。とまれ、仕事を続けながら研究に、運動に、走り続けた人生であったことは想像に難くない。感謝しつつ、安らかにお休み下さいと申し上げたい。残された我々が課題に取り組むのは心許ないが、峰さんの使った資料が下関のエスペラント図書館と JEI 図書館のエロシェンコ文庫に残されている。峰さんの気配を感じながら、それをどう引き継いで活用していくか、我々が問われている。

峰さんの業績は大きい

原田 作 (熊本県)

6月の終わりだったろうか？多分福岡の温泉川さんのグループの dissendlisto のメールであっただろう。峰さんが亡くなられた事を知った。ローソクと線香を関西エスペラント連盟宛ての住所で峰さんの御家族に送り、7月14日に奥様からのお礼の電話があり、翌日関西連盟の染川隆俊さんより「品物を奥様に届けさせて頂きました」と温かい葉書を頂いた。

実を言うと恥ずかしながら、奥様にも述べたが、峰さんの声や性格など全く知らない。顔はただ機関誌の写真で知っているだけ。ただ数回メールの交換をただけである。が御存じの通り人名事典や関西 E 連盟、日本 E 界の方で活動された事は皆さん、E-isto なら御存じのはず。峰さんの Esperanto の業績は大きい。まるで自分の知っている、ブラジルで泊めてくれた *Geraldo MATTOS* (元 Akademiano)、UEA 代表になる前知り合い、2000 年熊本の日本大会に来てくれた *Keppel ENDERBY* など、偉大な方を亡くした様な気がしてならない。また高校連盟時代からお世話になった奥村林蔵先生を亡くした時の様である。ご冥福をお祈りします！

2017.9

Adiaŭo al s-ro *MINE* Yositaka

Vilmos BENCZIK (Hungario)

La informon pri lia forpaso mi ricevis antaŭ kelkaj tagoj: retletero de s-ro *SOMEKAWA Takatosi* sciigis min pri la dolora evento. La sciigo ŝokis min, kvankam ĝi ne estis por mi plene neatendita, ja mi sciis pri lia grava malsano.

Nia interkonateco je mia bonŝanco estis longa, longa, ĝi ampleksis pli ol kvar jardekojn. Ĝia komenco datiĝas je la mezo de la sepdekaj jaroj de la pasinta jarcento. Laŭ mia memoro ĝi komenciĝis per tio, ke s-ro *MINE* mendis ĉe mi esperantlingvajn librojn, kiuj estis eldonitaj en Hungario. Ĉar tiutempe mi estis direktanto de la eldonejo de Hungara Esperanto-Asocio, mi estis kompetenta partnero por li.

Sed kunligis nin du ne nur la libroliverado, sed ankaŭ la ŝato al la esperanta kulturo. Pli frue mi aperigis kelkajn studojn pri esperantaj verkistoj en diversaj revuoj, kaj al s-ro *MINE* venis la ideo aperigi tiujn studojn en libro. Li proponis eldoni tian libron, kaj kompreneble mi akceptis lian proponon kun konsento kaj granda danko. Tiu libro, *Studoj pri la esperanta literaturo*, kiun eldonis lia eldonejo *La Kritikanto*, aperis en la jaro 1980. Tiu libro ĝis nun estas mia plej multe atentata kaj referencata esperantlingva verko; la baza monografio de *Geoffrey Sutton* "Concise Encyclopedia of the Original Literature of Esperanto" enhavas plurajn dekojn da referencoj al tiu libro, ofte citon de plenaj alineoj. Tion mi ŝuldas al s-ro *MINE*, ja sen lia instigo, laboro kaj monofero tiu libro ne aperus.

Kaj li aldonis pinton al sia amikeco al mi, kiam por la lanĉo de la libro somere de 1980 li invitis min al Japanio. Tiam mi traveturis preskaŭ la tutan landon. Tiu vojaĝo ebligis al mi vidi multegajn belaĵojn, kontaktiĝi kun amaso da afablaj japanaj esperantistoj, kiuj gastigis min en sia domo, kaj akiri plurajn dekojn da amikoj. Granda travivaĵo estis por mi persone renkonti *Miyamoto Masao-n*, eĉ pasigi nokton en lia domo; mi ne diras, ke mi tradormis tie nokton, ĉar fakte ĝis

mateniĝo ni babilis pri multegaj interesaj aferoj.

Dum tiu vojaĝado en Japanio mi nur bedaŭris, ke mia restado en la domo de s-ro *MINE* fariĝis tre kurta, ĉar dum la nokto post mia alveno al *Takasago*, la najbaro de s-ro *MINE* forpasis. Lige kun tio li havis tradiciajn devojn, kaj pro tio li ne povis okupiĝi pri mi. Tial mi devis pluvojaĝi al la sekva stacio de mia rondvojaĝo en la lando. Tamen dum la tuta rondvojaĝo mi sentis lian atenton kaj zorgadon. Li telefone informiĝis ĉe ĉiu stacio de mia rondvojaĝo, ĉu ĉio estas en ordo.

Dek kvar jarojn poste, en 1994, post la Universalaj Kongreso en Seŭlo, mi havis de li refoje inviton al Japanio. Ĉifoje la invito rilatis ankaŭ mian edzinon kaj tiam 15-jaran filinon. Ni povis pasigi tiam tre belajn tagojn ankaŭ en *Takasago* kaj ĝia regiono, kaj ni vizitis plurajn urbojn, interalie *Osaka*, *Yokohama*, Tokio.

Lastfoje mi renkontis s-ron *MINE* kaj lian afablan edzinon tiam, kiam ili venis kun turisma grupo al Budapeŝto.

Adiaŭ, s-ro *MINE*. Mi kaj mia familio gardos vin inter niaj plej belaj memoroj.

Rememoro pri kara amiko

Petro CHRDLÉ

(Ĉeĥio, posedanto de la eldonejo *KAVA-PECH*)

Mi ne plu rememoras, kiam mi ekhavis la unuan kontakton kun sinjoro *MINE Yosıtaka*. Kaj pro detruo de mia komputilo en la jaro 2008 mi ankaŭ ne povas elserĉi nian pli antaŭan korespondadon. Tamen mi bone rememoras, kiel malrapide, tamen daŭre, profundiĝis nia amikeco.

Unue ni havis nur komercajn rilatojn: Mi — eldonisto, *MINE Yosıtaka* — mia kliento reprezentanta KLEG. Sed pli kaj pli ofte ni korespondadis ankaŭ pri aliaj temoj: literaturo, vivo ĝenerale, niaj sanproblemoj kaj iliaj diversaj manieroj de terapioj en niaj landoj ktp. Mi malkovris en tiu mia geografie malproksima, sed home tre proksima amiko homon, kun kiu mi havas neatendite multon komunan.

Ni ankaŭ kunlaboris rilate al lingvaj demandoj. Kiam mi planis eldoni libron, kie la tekstoj estis tro eŭropecaj (kaj enhave, kaj pro la idiomaĵoj), tial komplete tradukeblaj, mi sendis la tradukitajn fragmentojn al mia japana amiko *MINE Yosıtaka* kun la demando, ĉu la Esperanto-traduko estas komprenebla ankaŭ por japanoj. Foje li respondis, ke ne, do mi devis igi la tradukinton ŝanĝi la vortumadon. La lasta tiuspeca kunlaboro estis en la jaro 2012 antaŭ la eldono de la esperanta versio de la dramo de *Karel Ĉapek* „R.U.R. — Rossumaj Universalaj Robotoj“.

Male, ankaŭ li turnis sin al mi ekzemple, kiam li renkontis malfacilaĵojn en sia poresperanta laboro, ekzemple en la jaro 2008 dum la redaktado de la verko de *MIYAMOTO Masao*, kiam li ne povis trovi la signifon de la vorto “paludino”, ĝis li finfine trovis ĝin en la reta Esperanta-ĉeĥa vortaro kaj do demandis min, pri kiu besto temas. Tio estis super miaj konoj, do mi kontaktigis lin kun la aŭtoro de la vortaro *Miroslav Malovec*, kiu klarigis tion al li. Do niaj reciprokaj helpoj estis ambaŭflanke utilaj.

Bedaŭrinde nia korespondado dum la lastaj kvin jaroj malplioftiĝis ĝis eĉ finiĝis, kion mi nun, post lia forpaso, riproĉas al mi, kial mi pro multaj taskoj ne plu kontaktis mian malŝanatan japanan amikon.

Kvankam ni estis proksimaj amikoj, ni persone renkontiĝis nur kelkfoje, dum miaj vizitoj en Japanio kaj dum Universalaj Kongresoj. La foto kun *MINE Yosıtaka* kaj lia afabla edzino rememorigas al mi la renkontiĝon dum la UK en Pekino.

Mia kara amiko, vi ne plu estas inter ni vivantaj esperantistoj, sed certe vi restos ne nur en miaj pensoj kaj koro! Ripozu en paco!





平和を願う CD 『地球星Ⅱ』

相川 節子 (京都府)

『地球星』は、鹿児島県の医師横山富美子(ふみこ)さんが作詞作曲した歌で、1991年に作られました。

憲法九条の精神を世界に知らせ、戦争反対を訴える歌で、世界中の人に歌ってほしいと、今年、エスペラント訳の依頼がありました。

歌手の野田淳子さんが窓口になって依頼を受け、やましたとしひろ (belmonto) さんがエスペラント訳を担当。それを野田淳子さんが歌っています。歌の途中で憲法九条の朗読が入りますが、これは松田

洋子さんをお願いしました。

できあがった CDには日本語の原詩・エスペラント訳・英語訳・アラビア語訳・ドイツ語訳・スペイン語訳がそれぞれ歌われ



ています。

1部2000円。ご希望の方は〒605-0034 京都市東山区中之町197-205 野田淳子さんへご連絡ください。電話とファクスは075-751-7967、メールアドレスはjunko@mwa.biglobe.ne.jpです。

Kurantaj Vortoj

- アルツハイマー病 Alzheimer-malsano
- アルツハイマー型認知症 Alchajmer-tipa demenco
- 付度 (そんたく) する konjekti; sondi; supozi; diveni
- ころりと死ぬ morti subite (abrupte; neatendite)
- 普陀落 (ふだらく) Potalako (観音菩薩 Avalokiteŝvaro の南方浄土)
- 阿閼 (あしゅく) 如来 Akŝobjo (東方の妙喜世界に住む)
- フィンテック financa teknologio (金融技術)
- ブロックチェーン blokoĉeno (ビットコイン等の分散台帳技術)
- ニホニウム nihoniumo (元素記号 Nh。理化学研究所が発見し命名した第113番元素。命名前の暫定名は Uut : ununtriumo (ウンウントリウム))

九州エスペラント大会を長崎市で

盛脇 保昌 (長崎県)

第91回九州エスペラント大会を今年、長崎市で開催します。今年は、世界大会が韓国のソウルで開催され、子供たちも多数参加しました。一方、九州のエスペラント会では、会員の高齢化が進み、後継者育成が急務です。そこで、大会テーマを「Ni kreskigu novajn esperantistojn! (新しいエスペランティストを育てよう!)」とし、特に若いエスペランティスト育成を考える機会にしたいと考えました。講演者として、長崎の若い(子供の)エスペランティストを育てている大江由紀さん、ソウル UK の IIK(子供大会)の gvidanto の金子暁美さん、ソウル UK 直前に開催される ILEI 大会に参加されるやましたとしひろさんをお願いしました。講演者の話が、若いエスペランティストを育てるためのきっかけになればいいと思っています。

期日: 2017年9月23日(土・祝) ~ 24日(日)

主催: 長崎エスペラント会

共催: 九州エスペラント連盟

会場: 長崎カトリックセンター(長崎市上野町10-34)

http://www.e-yh.net/nccyh/ 電話 095-846-4246

会場への交通は上記ホームページを参照ください。大会記念品:『さっさとエスペラント』(やましたとしひろ著)

プログラム:(詳細は、https://sites.google.com/site/esperantokel/congreso)

9月23日(土) 13:30 受付

14:00 ~ 17:00 九州エスペラント連盟役員会

18:00 ~ 20:00 懇親会(オークションあり)

宝来軒別館 http://www.horaiken-bekkan.jp/

9月24日(日) 09:30 開会

09:31 ~ 09:33 「ラ・エスペーロ」斉唱

09:34 ~ 09:37 主催者歓迎挨拶

09:37 ~ 09:41 九州エスペラント連盟会長挨拶

09:41 ~ 10:20 来賓、各地方会挨拶

10:25 ~ 11:25 講演1 ながさ kids の活動

講師: 大江由紀さんと子供たち

大江由紀さんは、子供たちにエスペラントを教えています。ながさ kids の活動を聞き、子供たちのエスペラント歌もある。

11:30 ~ 11:45 パネルシアター

演者：庄山美喜子さん

11:45 ~ 12:00 記念撮影

12:00 ~ 13:00 昼食

13:00 ~ 13:55 講演 2 ソウル UK の IIK での活動

講師：金子暁美さん (IIK の gvidanto)

14:00 ~ 14:30 講演 3 ソウル UK 直前の ILEI 大会
ので活動

講師：やましたとしひろさん (ILEI 大会への参加者)
ILEI(Internacia Ligo de Esperantistaj Instruistoj)
は、プサンで開催され、各国の教育者たちのエスペ
ラント教育の最新状況を聞くことができますでしょう。

14:32 ~ 14:42 九州エスペラント連盟報告

14:42 ~ 14:45 次回開催地区代表挨拶

14:45 ~ 14:48「ラ・タギージョ」斉唱

14:50 閉会

費用:参加費(一般) 4,000 円(海外から・学生・家族・
不在参加) 2,000 円

記念写真代 1,000 円

宿泊費 3,900 円 (*1)

朝食費(24日) 500 円

昼食費(24日) 1,000 円

懇親会費(バンケード) 5,000 円

(*1)4 人部屋(和室)を用意しています。風呂、トイレ
は共同です。1 人部屋、2 人部屋、3 人部屋を希望
される場合は連絡してください。この場合も、風呂、
トイレは共同となります。歯ブラシ、寝間着は持参
ください。洋室や風呂、トイレ付きを希望される場
合は、市内のホテルを利用ください。宿泊は団体で
申し込んでいますので、長崎エスペラント会へ申し込
んでください。申し込み締め切りは、9 月 9 日です。

申込み：振込用紙に住所、氏名、電話番号、費用内
訳を(あればメールアドレスも)記入のうえ、次の振
込先へ振込みください。

(振込先) ゆうちょ銀行 振替口座：01880-2-
6459 長崎エスペラント会

問合せ先：盛脇保昌 pgb012440@nifty.com。電話
0957-43-4352 (盛脇保昌)

土曜エスペラント会

東京のエスペラント会館で開いている土曜エスペ
ラント会は、8 月は休会。9 月から 11 月までは毎
月第 2 土曜日に開催する。

問合せ先：山川修一 <shu@gol.com>。

ソウルの世界エスペラント大会

開会式の様子などを YouTube で見られる。

<https://www.youtube.com/user/JehunKoa/videos>

<https://www.youtube.com/user/Evildela/videos>

なお、開会式時点では参加者は 61 か国の 1161
人だった [←西永 篤史・柴山 純一]

Komuna Seminario に出口王仁三郎賞

第 102 回世界エスペラント大会の閉会式で出口
王仁三郎賞が Komuna Seminario (KS) に贈られ、
1982 年の第一回 KS を代表して、韓国側から朴基
完さん、日本側から北川久さんが登壇し賞状を受け
た。2000 ユーロの賞金がつく。

閉会式の写真はフェイスブックの下記ページで。
[https://www.facebook.com/stefan.macgill/
posts/1531473563584116](https://www.facebook.com/stefan.macgill/posts/1531473563584116) [←北川 郁子]

関西エスペラント大会後援の御礼

日本エスペラント協会：報告書とともに
Kongresa Raporto と豊中エスペラント会 (TEG)
機関誌 Lampiro を提出した。

とよなか国際交流協会：報告書と資料を提出した。

豊中市民活動情報サロン：報告書は、ショーウィ
ンドウ展示撤去時に提出しているの、今回は
Kongresa Raporto 等を提出した。サロン事務所は
「これらを豊中市役所コミュニケーション政策課へ
提出します」と言って受理してくれた。

なお、サロン事務所は、関連グループのファイル
棚を案内して「今後は TEG ファイルも作りますか
ら見に来て」と言ってくれた。 [←佐野 寛]

Vilmos Benczik さんの最新作 “Pri la natureco
kaj artefariteco de lingvoj” をダウンロードでき
ます：<http://mek.oszk.hu/16800/16840/>

[de p. 5]

- 1) Ŝtona ĝardeno
- 2) Niĵoo-kastelo
- 3) Vendejo de japanstila vestaĵo
- 4) Stacidomo de Kioto

Mi tre ĝojis esti kaj travojaĝi kun s-ino Aikawa kaj
s-ino Sano.

Vortkruca enigmo

Redakcio

Vicigu adekvate 7 literojn trovitajn en la kvadratetoj kun steleto. Tiam vi akiros nomon de besto, kiu apartenas al reptilio.

Sendu la trovitan vorton kiel solvon de la enigmo ĝis la 20-a de septembro, paperpoŝte al la oficejo de KLEG, aŭ retroŝte al <lamovado@gmail.com>.

Rimarko: (x) signifas, ke la vorto ne portas finaĵon.

1	2	3	4	5	6	7	8	9
10		*				11		
12					13			*
14		15		16			17	
	*			18			19	20
21	22					23		
	*							*
24				25	26		*	
	27							
28			*	29				

Horizontale: 1. ~istoj rapide skribas la diskuton de parlamentanoj per specialaj literoj.(x) 10. Mato el junko kaj rizpajlo, uzata en japanaj ĉambroj.(x) 11. Tediĝi.(x) 12. Juna homo estas jun~o.(x) 13. Ĉar la ĉambro estis malpura, mi pur~is ĝin.(x) 14. Konstante laborema.(x) 18. Prepozicio signifanta direkton de la ago.(x) 19. Ĉi tiu kokino demetas ~on ĉiutage.(x) 21. "Unu", "du", "tri"... estas ~oj.(x) 23. Limigita terspaco.(x) 24. Ege.(x) 25. Post laboro mi ~as min per karaokeo.(x) 27. Sufikso signifanta devigatecon.(x) 28. *Tokyo Skytree* estas la plej ~a turo en la mondo.(x) 29. Per sono averti pri danĝero aŭ similaj.(x)

Vertikale: 1. Persono, kiu estas edukata en universitato.(x) 2. Plej malvasta parto de homa

korpo, inter la subo de la brusto kaj la koksoj.
(x) 3. "La ~a Princo" estas fantazia rakonto de *Saint-Exupéry*.(x) 4. Esperanto estas inter~a lingvo.(x) 5. Unuo de elektra rezistanco.
(x) 7. La ~estro de Usono estas la prezidento, .(x) 8. "Homar~ismo" estis la plej grava ideo por *Zamenhof*.(x) 9. Malbone fari pro manko de atento aŭ zorgo.(x) 13. Iamaniere.(x) 15. Malĝoji kun krio aŭ plendo.(x) 16. ~istoj staras antaŭ la pordo de la palaco.(x) 17. Kruele turmenti por akiri konfeson.(x) 20. Konforma al realo kaj fakto.(x) 22. Oni aŭdas per ~oj.(x) 23. Gramatika finaĵo de verbo.(x) 26. Pro ia kialo.(x)

La solvo al la julia enigmo: GALAKSIO

La ĝustan solvon donis 16 legantoj:

武藤 たつこ、
水渡 篤子、
前藤 寛、
平井 倭佐子、
西 千寿子、
馬場 祝栄、
久保田 俱視、
濱田 國貞、
にし のりこ、
中村 文雄、
CA, TADA、

M	E	D	I	C	I	N		P
A	N	I	M	A	L		G	E
T		K	A	R		T	E	R
E	K		G		S	O	N	
N	O	V		S	K	R	I	B
	M	E	N	T	O	N		U
O	P		I	R	L	A	N	D
N	U	B		A		D	E	
I	T		E	T	N		V	I

Orion, Sayuri, Grebo, Kacu

El Popola Ĉinio が 世界各国料理のビデオを募集

- (1) ビデオフォーマットは MP4、
- (2) 撮影方向は横向き、
- (3) 説明はエスペラントで、
- (4) ビデオの時間は 6 分以内でお願いします。
- (5) ビデオが重くメールに添付できない場合には Dropbox にアップロードしてリンクを送っていただいても結構です。
- (6) メールにはお名前と国名を明記してください。

※このお願いのエスペラント原文は下記に。

http://www.espero.com.cn/2017-06/23/content_41085444.htm

Mikspoto (当欄は敬称略)

★7月3日 YBS 山梨放送が山梨エスペラント会のテレビ取材 (<http://www2.ybs.jp/tetete/club/> 山梨エスペラント会7月3日)。同番組「ててて」で放送。

★日中文化交流市民サークル「わんりい」発行の『わんりい』で、大類善啓(おおいよしひろ)が『混迷の時代を拓くザメンホフの人類人主義「私は人類の一員だ!」』のタイトルで連載している。7月号掲載の第15回はベトナム戦争に抗議して焼身自殺した由比忠之進について。 [←田平 正子]

★工藤美知尋著『特高に奪われた青春 エスペラントティスト斎藤秀一の悲劇』8月に芙蓉書房から刊行予定。エスペラントティスト、ローマ字論者の斎藤秀一(さいとうひでかつ 1908-1940)が、なぜ治安維持法で投獄され32歳で死んだか。

★ティヴァダル・ソロス著『仮面のダンス』が現代企画室から刊行。404頁、定価2200円+税。投資家ジョージ・ソロスの父の一家はハンガリーを占領したナチスから「仮面」をつけて生き延びた。日本語版は“Maskerado Ĉirkaŭ la Morto”の11番目の言語への翻訳。コーディネーターは安藤紫(あんどう ゆかり)。 [←安藤 紫]

★「書物の時空」57号(2014年)で上田敏が、マダーチ・イムレ『人間の悲劇』を紹介し、「私はこの本を…17歳の時にエスペラント訳で読んだ」と。

楽しい作文教室 11月号課題 (9月20日締切)

- ①やさしい三つの質問に答えなさい。
- ②単純な事項を複雑にしないように。
- ③どうやって象を冷蔵庫内に置きますか？
- ④冷蔵庫のドアを開けます。
- ⑤象を中に入れます。

(ヒント) 複雑にする kompliki、象 elefanto、冷蔵庫 fridujo。en、interne を調べましょう。この課題は次号に続きます。日本語の原文の内容が、相手にはっきり伝わるように考えて訳してください。

送付先:

[郵送] 〒674-0092 明石市二見町東二見 515-1-811 塚本 猛

[電子メール] c_tak@esperanto.ne.jp

(件名に「作文」の文字を入れてください)

添削は受け付けておりませんのでご了承ください。

[編集部注] エスペラント訳とは、カロチャイ訳“La Tragedio de l' Homo” (<http://mek.oszk.hu/00900/00928/html/>) のことか。

★エスペラントで「コイン」を意味する Monero という名前の仮想通貨が2014年から使われている。Bitcoin より匿名性が高いため犯罪関連の送金に利用されるとの懸念もある。

★スマートフォン用アプリ“DekKvinPeca Puzlo”が Google Play で公開された。いわゆる「15パズル」で、標準は1~15の数の並べ替えだが、画面をザメンホフの肖像画やバベルの塔などに変更できる。Android 専用で、iPhone 等では利用できない。

第49回 Friska Lernejo

日程: 2017年9月16日(土)~17日(日)

場所: (京都) エスペラント会館

・初級作文(相川節子)・初級文法(田熊健二)

・中級会話(Songanta)

詳細は: http://kleg.jp/jap/49a_FL_informilo.htm

※ La Movado 8月号付録 Friska Lernejo のお知らせの、分科会「訳しやすい関係代名詞、訳しにくい関係代名詞」の説明で、字上符文字が印刷されていませんでした。“trovi as”を“troviĝas”に、“konstrua oj”を“konstruaĵoj”に訂正します。

KLEG

事務局だより

★KLEGのソウル世界エスペラント大会旅行団は、7月31日に無事関西空港に帰着しました。

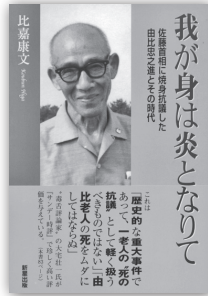
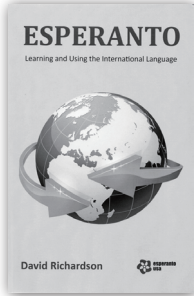
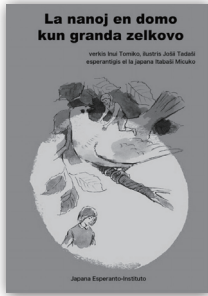
★第49回林間学校が9月16、17日(京都)エスペラント会館で開催されます。ロンドの例会とは違ったレベルの学習に取り組んで見ませんか。また、林間学校にはKLEG書店が開催され、5%引きで購入できます。欲しい図書・CDがありましたら、事務所に予約いただければ確実です。

KLEG後援会へのご寄付 (2017年7月、敬称略)

匿名	5,000円
柴山純一	800円
伊藤純子	800円
平岡五城	800円
伊藤照子	200円

ご支援ありがとうございます。

今月は、他に平山忠敬(神戸エスペラント会)さんから寄贈いただいた蔵書を希望者に差し上げましたが、その際「海外図書寄贈基金」へのカンパを募りました。その結果、9,000円が集まりました。ありがとうございました。



★ 新刊・新着 ★

La nanoj en domo kun granda zelkovo 1200円
いぬいとみこ『木かげの家の小人たち』(板橋満子訳)。毎日欠かさず小人たちにミルクを届けることがゆりの大切な役目。戦争がはじまりそれはしだいに困難に……。長く読み継がれる児童文学。日本エスペラント協会発行。A5判、208p。

ESPERANTO Lernig and Using the International Language 2100円
英語話者向け学習書の第4版。全10課の文法講座と物語・詩・手紙などバラエティ豊かな読み物、エスペラントー英語の単語集付き。A5判、331p。

Noaj Komedioj 800円
島谷剛訳『対訳狂言』。「附子」「川上地蔵」「盆山」などよく知られたものから新作「ザメンホフ」まで狂言18曲を収録。A5判、112p。

Pri arto kaj morto 1000円
宮本正男のエスペラント原作(第2版。初版は1967年エスペラント研究社刊)。山上憶良、大伴家持、世阿弥、千利休、芭蕉、写楽、歌麿、与謝野晶子の芸術と生の軌跡を描く。A5判、119p。

★夏の陽射し、平和に思いをめぐらす★

我が身は炎となりて 1800円
比嘉康文著。沖縄のジャーナリストが10年かけて描いた信念の人・由比忠之進の生涯。

Notoj pri la delto 400円
広島で被爆した岡田春の手記「デルタの記」。

Vojaĝo en Hiroshima 800円
原爆資料館などをめぐるガイドブック(新版)。

エスペラントと平和の条件 1100円
寺島俊穂著。「平和学からみたザメンホフ」など。

La Konstitucio de la Regno Japanio 600円
NUN-vortojの新訳「日本国憲法」。原文対訳。

Pacmesaĝoj tra la mondo 1500円
堀泰雄が世界大会などさまざまな機会に集めた平和を願うエスペランティストの声。

★峰芳隆の業績★

Studoj pri la esperanta literaturo 500円
V. Benczik著。“Principoj pri la studado de la Esperanta literaturo”など文学論+作家論。

Lumo kaj ombro 500円

La tundro ĝemas 500円

Malvasta kaĝo 500円

Stranga kato 500円

La kruĉo de saĝeco 800円

Cikatro de amo 900円

エロシェンコ選集全6巻。エスペラントと日本語で創作した盲人エスペランティストの作品を網羅。

ご注文は郵便、ファクス、電子メールで。送料は実費。現品と一緒に請求書を送ります。支払いは振替口座で。

編集ノート

★読者のみなさまのご要望を付度(そんたく)して、“Kurantaj Vortoj”欄を復活しました。

★belmontoさんの連載は次回から平安時代の古典『源氏物語』から『蓬生(よもぎう)』を始めます。美男美女の範疇から逸脱した末摘花の話。(島谷剛)



発行所：ラ・モバード社 編集：相川節子 発行人：染川隆俊 定価280円 送料62円 1年3800円 送料共本局：一般社団法人 関西エスペラント連盟内 561-0802 豊中市曾根東町1-11-46-204
電話 (06) 6841-1928 ファクス専用 (06) 6841-1955 電子メール：esperanto@kleg.jp
振替口座 00960-1-60436「一般社団法人 関西エスペラント連盟」 ホームページ：http://kleg.jp
九州支局：九州エスペラント連盟内 818-0105 福岡県太宰府市都府楼南2-8-7 武藤たつこ方 電話 (092) 923-2877
中国四国支局：中国四国エスペラント連盟内 771-0371 徳島県鳴門市北灘町櫛木字観音面14-1 木谷奉子方 電話(088)688-1098